

「周辺(periferia)の画家」

—コレッジョの形成期における諸流派との関係—

東北大学 小松 健一郎

フィレンツェやローマ、ヴェネツィアといった、いわゆる芸術的中心地で活動しなかったコレッジョ(本名アントニオ・アッレーグリ)には、ヴァザーリ以来「地方の画家」というイメージが付きまとっている。とくに初期作品には多数の画家からの影響が指摘されており、どの流派にも分類しがたい独特な形成期を送ったと考えられる。近年、マントヴァやその近郊のサン・ベネデット・ポーでの制作についての研究が進むにつれ、マンテーニャとの結びつきが強調される傾向にあるが、そうした見方は多様な影響源を単純化してしまうおそれがあり、「周辺」地域における芸術的環境を十分に考察できていないとは言えない。そこで本発表では、故郷コレッジョにおける活動に焦点を当てることによって、様々な流派と関係を持っていた要因を探る。

初期作品の多くは小型の個人向けの作品であり、注文の経緯や詳しい来歴を辿ることは難しいが、《聖フランチェスコの聖母》、《四聖人》、《エジプト逃避途上の休息》といった比較的重要で、注文や設置場所の記録が残っている作品が故郷で制作されている。また1510年代の文書記録によって、たびたび故郷で画家の存在が確認されていることから、パルマに移る以前の画家が、生地であるコレッジョを拠点としながら、同地やマントヴァ、レッジョ近郊のために作品を制作していたことがわかる。

画家の様式展開については、これまでマンテーニャ的な様式からの脱却という観点から語られることが多かった。しかし、より早い時期の作品においても、その柔らかい衣襲や風景表現には「マンテーニャ的な固さ」と称される線的な描写よりもむしろ、ロレンツォ・コスタやフランチェスコ・フランチャ、同じくポー川流域の諸都市で活動したドツソ・ドッシ、ガローファロなどとの近似性が認められる。そこで、モデナやレッジョを含む近隣都市の画家たちの作品と比較することにより、画家があるひとつの芸術的伝統から出発したというよりも、同時期に複数の都市・流派の作例から学んでいたことを示したい。

一定の画家・流派の影響下に限定されない多様な源泉が認められることは、単にこの小都市に主導的な画家が存在しなかったということではなく、近隣諸都市との間の緊密な関係があったことを窺わせる。エミリア地方のポー川流域には、画家の故郷以外にもカルピやノヴェッラーラなどの小宮廷が並び立ち、それぞれエステ家やゴンザーガ家に対する政治的・文化的な模倣・競争の意識を持っていた。こうした文化環境は、故郷に招かれた諸都市の画家たちの作例を直接眼にすることを可能にし、また自らそれらの都市に赴くことを促したに違いない。以上のことから発表者は、小都市ゆえの主要な流派に分類されない中間的な立場が、「中心」に追隨する「周辺」としてではなく、様々な影響源や活動の場を選択できた環境として積極的に評価できることを新たに提示する。